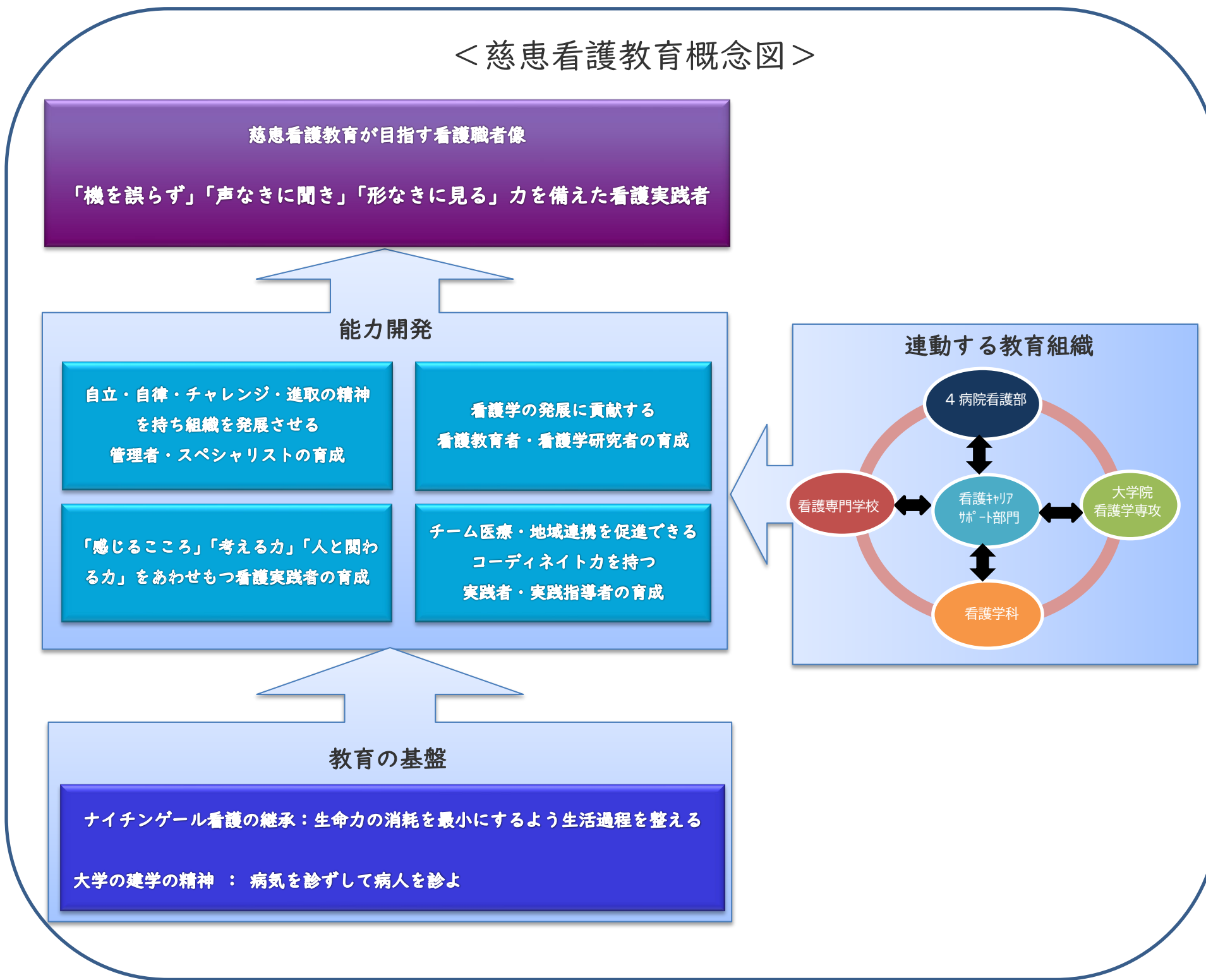


慈恵看護教育に携わる全組織がめざす看護職者像

< 慈恵看護教育概念図 >



慈恵看護教育が目指す看護職者像として表した言葉の由来

慈恵では、英国セントトーマス病院医学校留学から帰国した高木兼寛がナイチンゲール看護婦教育を受けた米国人宣教看護婦ミス・エム・イー・リード（M.E.Reade）女史を招いて 1885 年（明治 18 年）に看護教育を始めた。

1889 年（明治 22 年）10 月 18 日、時の外務大臣大隈重信氏が、暴徒の投げた爆弾のために右脚を負傷する事件が起きた。事件発生時、付近を通りかかった学祖高木兼寛は、驚いて駆けつけ、治療にあたった。

足の切断手術後一命をとりとめたのちに、大隈氏が自宅療養する際に、東京慈恵医院看護婦教育所の看護婦生徒であった 6 回生 4 名が派出された。その時の看護婦生徒の仕事ぶりについて夫人からお礼の手紙をいただいた。《…周到綿密細心誠意、医師の指示を得て機を誤らず、病者の意を汲んで、声なきに聞き、形なきに見て、その一挙一動が万事に行き届いていて、それも数十日の久しきにわたっている…》（一部抜粋）

これは、慈恵の看護師のありたい姿と見事に合致している。目に見えているものと目に見えないものの双方をまるごとみつめる、対象を全人的に看ることが慈恵看護の大切にしているものである。

慈恵看護教育が始まって 130 年の節目となる 2015 年（平成 27 年）、改めて大隈重信夫人からいただいた言葉の重みをかみしめ、慈恵看護教育が目指す看護職者像として“「機を誤らず」「声なきに聞き」「形なきに見る」”力を備えた看護実践者”を掲げた。